

二次被害を防ぐためにできること

では、二次被害を防ぐためにはどうしたらよいのでしょうか？ これには、**社会のレベル**で行なうこと、**個人のレベル**でできることがあります。



社会のレベルで
行なうべきこと

(1)レイプ被害に対する無理解や偏見を改めるための、教育や啓発を推進する

一番大切なことは、レイプが人の心と体を深く傷つける深刻な犯罪であることを社会が理解し、レイプ神話のような偏見をなくしていくことです。これは、教育や社会的啓発の中で行なうべきことです。

学校教育の中で、性のあり方や性被害について学び、考える時間を持つことです。特に高校生や大学生に対しては、予防教育が重要といえます。

被害者に接する職業に従事する人に対しては、養成教育の一環として、また資格取得後の研修として、被害者の心理と二次被害について実践的に学ぶ必要があります。

マスコミの役割はとても重要です。レイプ神話を助長するような報道や番組、出版物をつくらないことです。そのような報道を視聴者が批判する視点を持ち、マスコミ業界が自ら規制するとともに、むしろ被害者にとって有益で、性のあり方を考え直すような報道を行なうべきでしょう。


社会に影響力のある人々が正しい認識を持つ。どんな人であれ、一人ひとりが正しい認識を持つべきであることは言うまでもありませんが、とくに議員や教育者など、周囲の人に影響力のある発言を行なう人たちは、レイプについて正しい認識を持つ必要があります。この人たちの認識が誤っていると、国の政治や教育、法律のあり方で歪んでしまうのです。

(2)被害者の受けるダメージを理解して、被害者を支援するシステムをつくる

被害を受けた人が、安心して支援を受けられるシステムが必要です。

現在、日本では、警察での被害者支援、裁判所での被害者支援、公的あるいは民間の女性相談室、民間の被害者支援団体（強姦救援センター、全国被害者支援ネットワークに加盟している被害者支援団体、その他の被害者のための民間団体やカウンセリング機関）などが存在しています。しかし、欧米にあるような被害の直後から支援するいわゆるレイプクライシスセンターは、極めて数が少ないのが現状です。

このようなセンターを社会や国がつくることと、その存在を知ってもらうことが大切です。また、仮ににそのような支援センターがないところでも、社会が被害者を守り、支える存在であれば、問題を最小限に抑えることができます。



個人のレベルで
できること

この冊子を読んだ人は、まず自分が、レイプをはじめとする性被害についてどのような認識を持っているか、考えてみてください。どんな人にも偏見はあるものです。まずは自分の持っている偏見がどのようなものか、そのことを知ることが大切です。

テレビなどでレイプ被害に関する報道があるとき、自分はどのように感じているでしょうか。もしも偏見があると感じたら、それは具体的にどのようなものでしょうか。

被害者の受けた心の傷について想像してみてください。自分がその立場だったらどのようにしてほしいかを考えてみてください。もしも自分の周りに被害者がいたとしたら、どのように接するべきか何ができるか、考えてみましょう。

あなたがそのようなことに思いをめぐらせるだけで、二次被害ゼロの社会への第一歩を踏み出していることになるのです。

5ページの人びとの言葉を思い出してください。実はあの言葉のいずれも二次被害を起こす可能性を持っています。それを防ぐためには、どうしたらよいのでしょうか。

被害者に接する人々は、留意してください



(1) 家族

多くの場合、家族は被害者と接する時間がもっとも長く、被害者にとっても近い存在なので、精神的に動揺しています。その動揺が、被害者を責める言動になって表れることもあります。

また、被害者と同じように、家族も社会や周囲の目を気にしてしまい、被害者に沈黙を要求してしまうこともあります。被害者もまた、家族には心配をかけたくないという気持ちが強く、被害のことを話さなかったり元氣そうにふるまったりと、実際の

気持ちとはうらはらの言動をとったりもします。その結果、どうして自分たちに相談してくれないんだろうと、家族の気持ちが傷つけられることもあります。

そのような意味で家族もまた、被害者のひとりなのです。家族がこの出来事を受け取るには相当の精神的負担があることを、家族自身も、周囲の人も知っておく必要があります。被害者のみならず家族もまた、専門の相談機関での支援を受けることで、状況が改善されることもあります。



(2) 恋人、配偶者、パートナー

被害者が一番信用して被害を打ち明けるのは、恋人や配偶者であることが少なくありません。そのとき、恋人や配偶者はしばしば加害者に対する激しい怒りを表して、被害者を当惑させたり、心配のあまり被害者の意思を無視した行動に出たりすることがあります。動揺のあまり、被害者に落ち度があったのではと責めてしまうこともあります。

特に恋人は、被害者の支えになりたいとの思いから、初期にはいつも一緒にすごしたり、何でもしてあげようとして、ひとりで問題を抱え込んでしまうことがあります。結局それが過度の負担になって別れて

しまうこともあります。そうした問題を防ぐためには、何もかもひとりで抱え込みすぎないことです。被害者支援センターなどの機関に、恋人や配偶者が相談に行くというのもひとつの方法です。

また、レイプ被害にあった被害者は、その後性的な接触に強い拒否感を持つことが多いです。被害者が性的な行為をしたくない、あるいはその行為に喜びを得られないという状態は、周囲が考えるより長く続くことがあります。その場合には、お互いがどのように考えているのかを話し合い、被害者の気持ちを尊重することが大切です。



(3) 友人

被害者が、親しい友人にだけ被害を打ち明けるということも少なくありません。友人は大変ショックを受けるとともに、助けになりたいと思ってもどうしてよいかかわからず、不用意な言葉をかけてしまうこともあります。

「がんばって」というのはつい言ってし

まいがちな言葉ですが、被害者は「これ以上何をがんばればいいのか」と思い、「やっぱり努力が足りないんだ」と悩んでしまうことがあります。

むしろ、「あなたはやれるだけのことは十分やっている」というメッセージを送って、被害者の自尊心や自信を強めてあげましょう。



(4) 警察官、検事、裁判官など刑事司法関係者

刑事司法手続きの中には、被害者にとって苦痛なものが多くあります。事情聴取で言いたくないことを言わなくてはいけないこと、現場検証で事件が再現されること、自分のプライバシーが明かされることなどです。刑事司法関係者は、職業上の行為そのものが被害者を傷つける可能性があることを知っている必要があります。

とはいえ、特別なカウンセリング技術が求められるわけではありません。被害者の心理を理解して、仕事の中で可能な配慮をするだけでも状況は大きく改善さ

れます。具体的には、被害者が顔や名前を知られたくないと思っていること、精神的に動揺してうまく表現ができないこと、事件にかかわることに強い恐怖心を持っていることなどを理解し、そのことに対する配慮を忘れないことです。

被害者が人目にさらされないよう部屋を工夫することや、実況見分などは女性警察官が行うこと、付き添いを用意すること、時間をかけて穏やかに話し合うことなどは、被害者の苦痛をやわらげる助けとなるでしょう。



(5) 産婦人科

被害者は、妊娠や性病の予防、外傷の治療のために、産婦人科を訪れることがありますが、事実を言いにくいことがあります。話が外部に漏れないところで安心して事情を説明し、処置についても医師からきちんとした説明を聞く環境が求められます。

また、緊急避妊について知識のある被害者は少なく、被害者のほうから尋ねない場合でも、性病や妊娠の危険性について医師

から説明することが必要です。あわただしい外来でさっさとすませるのではなく、時間をかけて被害者と話し合う時間を改めてとってもらえるとよいと思います。

このような場での二次被害を防ぐためにも、医学教育の中に、レイプ被害者の心理と被害者への接し方が盛り込まれることが望ましいのです。

被害者の回復を助ける7つのポイント

ここまででは、レイプ被害者がいかに被害後も傷つけられやすい状況にあるかということについて説明しました。それでは、実際にどのように接したら不用意に被害者を傷つけずにすむのでしょうか。いうまでもなく、この問題については絶対的なマニュアルがあるわけではなく、人によって受けとめ方、感じ方も異なります。しかし、ある程度共通していると考えられる対応について、取り上げました。

1 被害者を責めない

もっとも起こりがちな二次被害のひとつに、レイプ被害にあった原因について被害者を責めるということがあります。たとえば、「女性が暗い夜道をひとりで歩いているなんて、レイプしてくれといわんばかりじゃないか」などというものがそれです。

昼間だろうと夜だろうと、レイプの罪に変わりはありません。そのことによって、加害者の罪が軽くなったり重くなったりするのはおかしいと思いませんか。

大事なことは、犯罪の責任は加害者にある、被害者にはないということ。責められるべきは被害者ではなく、加害者なのです。

2 被害者の罪悪感や自責感を助長しない

多くの被害者は、誰かに何かを言われるまでもなく、すでに罪悪感や自責感に悩まされています。自分の服装やそのときとった行動、自分の何かがレイプを誘ったのではないかと、自分をもっと抵抗すれば防げたのではないかなど、自分を責めて後悔しがちです。

ですからたとえば、周囲の人が慰めようと思って「あなたが、もう少し早く帰っていたらねえ」などと言うと、自分はそうすべきなのにしなかったということで、被害者は自分をますます責めてしまいます。

3 被害者の気持ちをよく聞く

大切なことは、被害者の罪悪感や自責感を軽くすることです。しかし被害者に向かって、罪悪感を持たないようにといっても、それは難しいことです。本人がどのような罪悪感を感じているのかを理解するようにしてください。無理やり聞き出すのではなく、被害者が話せる範囲のことをゆっくりと聞くことです。被害者の話を批判したり、批評したりせずに、ただそのまま受け止めてあげましょう。

4 被害者が悪いわけではないことを理解してもらう

被害者がどのようなことで罪悪感を感じているかがわかったら、そのように考える必要はないことを説明してあげましょう。たとえば、自分のとった行動を責めている場合には、「責任は加害者にある、あなたが悪いわけではない」ということを話してあげましょう。

また、加害者に抵抗することは物理的にもとても困難なこと、被害者はできることを十分つくしたと、被害者が自分を責めているのは「レイプ神話」とらわれていることなどに本人が気づくよう、よく話し合うことが大切です。

5 被害者がおかしいわけではないことを知ってもらう

被害後の精神的な混乱やさまざまなトラウマ症状のために、被害者は自分が精神的におかしくなったのでは、またはおかしくなるのではという不安感を抱きます。被害者には、「レイプのようなひどい被害にあった人が精神的に混乱するのは当然のこと」ということを伝えてあげると、本人はほっとすることが多いようです。「ひどい被害にあった人にみられる自然な反応」という理解を、周囲も本人もすることが大切なのです。

6 被害者の感情を認める

被害者が安心して感情を出せることは精神的回復に有用です。急性期の被害者は、精神的な麻痺から感情の表現ができないことがあります。それ以外にも感情を表現しにくい理由があります。たとえば「泣いてばかりいてはいけない」とか、「早く落ち着きなさい」「そんなに怒ってはいけない」などと周囲から言われることによって、被害者は感情表現を抑制してしまうことがあるのです。

特に周囲の人は、被害者の怒りを受け止めにくいようですが、被害者の加害者への怒りなどは、「そう感じるのはあたりまえ」というふうに被害者の感情を正当なもののみなしてあげるべきでしょう。

7 被害者を無力化せず、有力化(エンパワメント)する

二次被害と気づかれにくいもののひとつに、被害者を無力化してしまうことがあります。周囲の人が被害者を気づかうあまり、本来被害者自身がすべきこと（たとえば産婦人科に行くことや警察での事情聴取など）を、しなくていいようにしたりすることです。

多くのレイプ被害者は、自分の感情をコントロールできなくなったりすると、自分を弱い存在だと感じ何もできないと思ってしまいがちです。そのような状態にある被害者に代わって、周囲が何でもやってあげたりすることは、かえって「あなたは何もできない」というメッセージを送ってしまうことになりかねません。被害者の意思を尊重し、自ら判断、行動できるように支えていくことです。